

現役教師ですが
“教育”について
こんなことを考えてます。

— これからの教育を担う人たちへ —



受験生にとって聞けそうで、なかなか聞く機会がないのが現役教師の教育観。
毎月1つのテーマを取り上げ、先生方の考えを聞いてみました！

今月のテーマ：「スポーツと自分」

オリンピックが近づくなか、スポーツへの関心が高まっています。
国境を越えて愛されるスポーツは教育にも欠かせない存在です。今
回は小吹先生にスポーツと教育現場の関わりについて聞きました。

著 小吹耕平

茨城県石岡市出身。平成24年
小学校教諭になる。現在、千葉県
八千代市立西高津小学校教諭。

諦めることが次への挑戦

私は茨城県石岡市出身で、現在千葉県八千代市で
小学校の教員をしています。今年度で8年目の2校
目。機会あってか、2校とも体育を研究する学校で
経験を積んでいます。私とスポーツとは、切っても
切れない縁であると感じています。

ここで、私のスポーツ遍歴を紹介します。幼稚園
時代にはサッカー。小学校、中学校時代には野球。高
校時代にはバスケットボール。大学時代にはラクロ
スを経験してきました。始めたきっかけは、ほとん
どがその時に一番したいことだったからです。

幼稚園のサッカーでは、先生からピカピカのサッ
カーボールをもらっている列を発見し、自分も欲し
くて並びました。話を聞くと、申し込みをしている
子だけがもらえるサッカーボールで、母が後日手続
きをしてくれました。

野球は、小学校5年生から始めましたが、きっかけ
は、同じクラスのライバルが野球をしていたからで
す。あえて違うチームを選び、野球で勝ちたいとい
う思いで始めました。

高校では、バスケットボールを始めました。これ

はバスケ漫画がきっかけで、挑戦する主人公の姿に
憧れて始めました。また、一緒に始める仲間がいた
ことも後押しをしてくれました。

大学では、ラクロスを始めました。バスケットボ
ールでは周りについていく自信がなかったので、今
までのスポーツ経験を活かせ、なおかつ大学から始
める人の多いラクロスを選びました。

新しいスポーツを始める際には、その時々で諦め
がありました。野球ではライバルにかないませんで
したし、バスケットボールは大学で続けていける実
力がありませんでした。しかし、この諦めは決して
ネガティブなものではなく、次に自分が新しいもの
と出会うきっかけ。諦めてきた回数分の出会いを経
験してきました。程よく諦めてきたことが、大学ま
で部活動を続けてこられた要因の一つなのかもしれ
ません。数々の経験は、私にたくさんの知識や技術、
人々との繋がりをくれました。社会人になった今で
も、サッカーや野球、サバゲーなどをしており、繋が
りがさらに広がっています。新しいものとの出会い
が「自分を変える力」となっています。次はどんなこ
とに挑戦をしようか、またどんな出会いがあるのか
とても楽しみです。

スポーツが繋げるもの

7月の開幕まであと半年を切った東京2020オリンピック・パラリンピック。世界中の注目がこの日本に集まります。日本で開催されることで、どのような変化が起こるのでしょうか。近い将来であるはずなのに、私の頭ではなかなか想像が付きません。少なからず、たくさんの世界の国々と繋がるチャンスとなると言えます。そして、人々に与える影響力も大きいでしょう。小学校の教員として、このチャンス、影響力をどのように活かすことができるのでしょうか。

私が考える子どもたちにできることは、「発信」することです。自分が新しい出会いからたくさんの変化をしてきたように、子どもたちにもたくさんのもとの出会い、成長するチャンスを与えていきたいです。幸いなことに、今は情報が簡単に手に入ります。ちょっと「オリパラ教育」と検索してみてください。それだけでも、かなりの実践例が出てきたことと思います。その中でこれから出会うクラスの実態、学校や地域の実態に合わせて実践例を選び、子どもたちにたくさん発信してみませんか？

情報や技術の急激な発達には、以前よりも世界との距離を縮めてくれたように感じます。記憶に新しいラグビーワールドカップ。日本チームを見ても、外国から来た選手が、日本代表として誇りを持ち、「ONE TEAM」として戦っていました。スポーツが国境を超えた瞬間のように思えました。

私は、ラグビーワールドカップで海外の選手が日本のチームとして戦う姿にとっても感動しました。ラグビーという共通のスポーツが、国と国とを繋いだのです。言葉や文化は違えど、お互いの共通のもので繋がっているのだと感じました。しかしながら、同じ文化や言葉であるはずの国内でさえ、分かり合えないことがたくさんあります。長い間、教育界で問題になっている「いじめ」の問題もその一つです。自分との違いにばかり目がいき、それを認められな

いことが原因の一つであると私は考えます。世界がラグビーという共通点で文化や言葉を超えたように、身近な生活の中でも互いの共通点を見つけたり創ったりすることで、温かい人間関係が育まれるのではないのでしょうか。

このような私の思いを子どもたちに発信するために、子どもたちと考えたいことがあります。「ラグビー日本代表チームでたくさんの外国人がプレーしていることに賛成か反対か」。5年生の国語の学習である、「意見こうかん会をしよう」の一つのテーマとして、子どもたちの意見を聞いてみました。皆さんもぜひ、考えて話し合ってみてください。今からオリンピック・パラリンピックでたくさんの感動を味わうための準備ができそうです。

発信することが未来の教育に

私は、学級経営の中で大切にしていることがあります。これまで述べて来たように、自分の考え・価値観を子どもたちに「発信」することです。1年間という限られた時間の中で、自分に伝えられることを伝えていきたいです。

「意見こうかん会をしよう」でも、ラグビーについて、子どもたちに私の思いを発信してよかったと思いました。子どもたち一人一人が自分の考えを持ち、相手の立場に立ち、今やこれからのことについて話し合っている姿に、これからの将来が楽しみになりました。これも、1つの「オリパラ教育」であると考えます。この学習の最後、子どもたちに「他を理解し、受容する」大切さ、「互いの共通点を見つける・共通点を作る」大切さを伝えました。伝えたからには、自分自身もその心を持ち、子どもたちに考える機会や触れる機会をたくさん発信していきます。それが子どもたちの出会いとなり、成長につながるはずで、これからも、将来につながる教育を心がけていきたいです。

今月のまとめ

- 新しいスポーツを始める際には諦めがあったが、ネガティブなものではなかった。
- 互いの共通点を見つけたり作ったりすることで、温かい人間関係が育まれる。
- 自分の考え・価値観を子どもたちに「発信」することが大事である。

現役教師ですが
“教育”について
こんなことを考えてます。

—これからの教育を担う人たちへ—

受験生にとって聞けそうで、なかなか聞く機会がないのが現役教師の教育観。
毎月1つのテーマを取り上げ、先生方の考えを聞いてみました！

今月のテーマ：「生徒が自ら考え行動する部活動」

今月のテーマは「生徒が自ら考え行動する部活動」。部活動は生徒指導においても大きな役割を果たしますが、生徒が自主的に行動するような効果的な指導は難しいもの。宍戸先生はどのように工夫したのでしょうか。

著 宍戸隼

千葉県八千代市出身。平成16年
中学校教諭になる。現在、千葉県
八千代市立萱田中学校教諭。

バスケットボールと自分

私は小学校4年生から大学まで、バスケットボール部で活動してきました。父は高校教師でバスケット部の顧問、兄は国体選手というバスケット一家に生まれました。

人生の大きなターニングポイントは高校時代。全国レベルの高校でチャレンジしたいと親元を離れ、神奈川県にある名門高へ進学しました。

将来は全日本選手になる！ という夢を持ち、覚悟を決めて門を叩いたのですが、待ち受けていたのは、想像を絶する厳しい練習、理不尽な上下関係、しごき……。

自分でもよく耐えたと感心しますが、何があっても耐えられるという忍耐力や自信がついたのも事実です。

人生最大の挫折を味わったのも高校時代。1年の時、「マネージャーにならないか」と言われました。これはプレイヤーでは使えないと言われたようなもの。私は泣きながら断りました。

その出来事をきっかけに、死に物狂いで練習し、レギュラーを取れました！ ってなるとドラマのよう

な話なのですが……。そんな簡単じゃないんですよ。「どうせ俺なんて」と心で何万回叫んだか分かりません。

このまま終わりたくないという思いから大学に進学しました。辛く厳しい部活動でしたが、この経験を活かし、がんばる子どもたちの力になりたいと中学校の教師になりました。

しかし、この経験を「よし！」と思っていたことが、後に私自身を悩ますことになります。

2年目から県大会の常連に

大学卒業後、4年間の講師経験を経て、千葉県で採用されました。初任校はいわゆる「教育困難校」でした。部活指導は生徒指導の効果も求められ、厳しく「軍隊」のようなチーム作りをしました。

試合をしても、うちのチームは1回戦負け。私は無我夢中で取り組みました。

「千葉県で一番になりたければ、千葉県で一番厳しい練習をしろ！ 強いチームの前によいチームになれ！」と口癖のように伝え、かなり厳しい指導をしました。それでも生徒たちはついてきてくれました。

その結果、2年目で県大会に出場したのをきっかけに、毎年出場するチームになりました。初任校の5年間で多少の結果を残せたので、自信を持って2校目に異動できました。

自分を変える

2校目でも県大会は毎年出場しましたが、このあたりから、私の指導が生徒とマッチしていないという違和感を抱き始めました。保護者からクレームをいただくこともありました。

自分が変わらなければいけないと思ってはいたものの、何をどう変えてよいか迷い、何よりも自分を変えるということは、自分がよし！ と思っていた高校時代の経験を否定することにならないのかと悩みました。

そんな中での3校目への異動。これをきっかけに少し自分の指導を変えてみる決意をしました。変化させたのは次の2点です。

① じっくり待つ。

技術的なことだけではなく、生活面も含めて、こちらが要求していることを実践するには子どもによって差があり、できるようになるには、それぞれかかる時間が違うということを認め、焦らず待つことを意識しました。

② 生徒との対話を大切にす。

生徒がどのような考えを持っているか、どうしたいのか、話を聞くことを心がけました。指導を少し変えてみると、生徒が分からないことを頻繁に質問してくるなど、意思表示するようになりました。自然と笑顔も増え、楽しさを感じながら取り組んでいたように思います。

生徒が自ら考えて行動する部活動へ

その後、教育委員会で勤務した3年間に自分の指導を振り返ってみたところ、間違いだらけだったと反省ばかりです。このままではいけないと思い、講演会やいろいろな方との出会いから勉強する機会をたくさん作りました。

同時に、文科省による部活動のガイドラインも施行され、部活動の在り方を考え直す機会となりました。

現代の子どもたちは、自ら考え行動する力が不足しています。言われたことは素直にやりますが、これだけでは社会で通用しませんし、スポーツでも同じことです。

部活動を通して、自ら考え行動する生徒を育てることが部活動の意義だと思います。生徒のやる気を引き出し、生徒が自ら考え行動する部活動にすることが大切だという考えに至りました。

現在、私のチームでは大会が終わると、1週間ほど生徒に今後について考えさせるようにしています。自分とチームを振り返り、次に向けて何を練習する必要があるのか、今後の練習メニューをボトムアップ型で考えさせています。

もちろん私の考えもありますが、まずは生徒がどう感じているか生徒の考えを尊重します。

対話をしてお互い納得して再出発すると、目標設定もしっかりでき、私がいなくても生徒自身が自分たちで考え、厳しく追い込んで練習するようになりました。

ほんの少しアプローチを変えただけで、生徒の取り組みが大きく変わったことは、大きな成果と感じています。

部活動は「心と体の鍛錬の場」と捉えています。私の中でこの考えは、いつの時代も普遍的ですが、取り組み方や生徒へのアプローチの仕方は時代と共に変化し、それに伴い、教師も考え方を変化させていくことが大切だと思います。

自分を変化させることは、レベルアップの証。一生勉強！ 一生青春！ だから教師は辞められません。

今月のまとめ

- 指導の改善を図るためには、自分の過去の経験に囚われずに考えることが大切。
- じっくり待つことと、生徒との対話を大切にすることで指導が改善していった。
- 生徒の考えを尊重し、対話で納得して再出発すると、自主的に取り組むようになった。